保育者養成課程における学生の性格特性
― プロフィール・パターンによる子ども観 ―

Personality characteristics of students in the nursery teachers training facility
― The view of child by profile and pattern ―

毛　利　泰　剛
Yasutaka Mohri

Ⅰ　問題と目的

幼稚園教諭及び保育士（以下、保育者）の社会的な需要は高まっており、ここ数年、保育者の求人数の高さが継続する状態である。実際、保育者を養成する大学、短期大学、専門学校等の養成校には学生の数を超える多くの求人が集まる。そのような状況であるから、保育施設が整備される一方で、現場からは保育士不足を悩む声も見られる。保育士不足の直接的な背景の一つとして、池本（2015）は保育士資格のハードルの高さを挙げている。しかし、試験による資格取得はかなりの難関であるが、保育士養成校の学生の多くは保育士資格を取得している現状がある。ただ、幼稚園教諭も保育士も需要が高く、多くの大学・短大は幼稚園教員免許と保育士資格を同時に取得できることや、他の資格免許も取得できることから、学生には多くの就職への選択肢が与えられており、すべての学生が保育士として就職するわけではない。また、保育職や教育職の身体的、精神的負担の高さや給与水準の低さなどから、一般企業への就職を目指す学生も少なくないのが現状である。

一方で、保育者として働き始めても数年で離職する者も少なくない。保育者に限らず、一般企業においても離職者の問題はあるが、保育者には様々な要因が考えられている。特に、新任保育者の離職については多くの研究がなされているが、保育に対する職責とかではなく、人間関係をはじめとした職場の環境が自分に合わないと感じて離職する者も多い。例えば、濵名・中坪（2019）は、新任保育者の離職と育成をめぐる研究の動向を検証しており、その結論の一つとして、新任保育者の属性等の個別具体的な背景に着目する必要があると述べている。属性には勤務園など様々な環境要因もあるが、性格や考え方といった保育者自身の要因も考えられる。

保育者自身の要因について、林・森本（2014）は保育現場が新入職者に求めているものは、知識や技術よりも人間性や責任感、礼儀、マナーといった社会人としての基本的な資質の面もあると述べている。資質に関連の深い性格特性を見出す研究として、高橋・高岡・林・岩本（2016）は保育者養成校の学生（以下、保育学生）の性格特性と進路状況との関連について調べている。その結果、保育職を選択することと性格特性に関連は見られなかった。しかし、保育学生の多くに共通する性格特徴として「情緒の不安定さ」を挙げている。これは、保育者養成において精神的な安定性を身に付ける支援が必要ということであるが、逆にこの不安定さが情緒の豊かさや感受性の深さにつながる側面であり、子どもを見て育てていく力につなげていくものであるという考え方もある。つまり、どの性格が保育者に向いているのかではなく、どのような性格の学生が子どもや保育に対してどのような感性を持っているかを知ることが重要であり、それに基づいた支援や養成を考えていくことが必要であるといえる。

保育者としての性格や資質を考えたとき、ある一定の子ども観の獲得は保育者の必須条件である（星野・石橋・藤本・松田,1995）といえる。子ども観の獲得に

ついて、毛利（2018）は保育学生が幼稚園や保育所での実習を体験することで、新たな子ども観と保育者観を獲得していくこと明らかにした。実習における保育学生の体験や感情によって子ども観が変化していくことから、子ども観の獲得には保育学生自身の性格が大きく影響しているのではないかと考えられる。実際、性格はそれまでの保育学生自身の生育環境や経験に基づいて形成されているものであり、それぞれの性格によって同じ実習体験でも体験過程は違ってくると考えられる。

そこで、本研究では保育者を志望する学生の性格傾向を見出し、子ども観との関連性について検討することによって、保育学生の性格傾向を理解し、保育者の資質を高める指導につなげていくことを目的とする。

Ⅱ　方法

調査対象　短期大学保育者養成課程１年の女子学生136名。そのうち未解答や回答不備を除き128名を分析対象とした。

調査時期　前期期間中の講義内（保育実習及び幼稚園実習等を経験する前）に調査した。

調査方法　東大式エゴグラム第２版（TEG-Ⅱ）と質問紙調査（子ども観尺度）を行った。

・東大式エゴグラム第２版（TEG-Ⅱ）について

エゴグラムはデュセイ ,J.M.（1980）によって開発されたパーソナリティ検査で、交流分析の理論を背景としている。エゴグラムではまず３つの自我状態に分けられる。P（親）A（大人）C（子ども）の自我状態である。Pはさらに CP（批判的な親）、NP（養育的な親）に２分される。また､C はさらに FC（自由な子ども）、AC（適応的な子ども）に２分される。これら５つの自我状態が評価項目となり、エゴグラムには各々の自我状態のエネルギーの強さが表示される。

本研究では、エゴグラムが日本で標準化され、最も使用頻度の高い東大式エゴグラム第２版（TEG-Ⅱ）を使用した。

・子ども観尺度について

嘉数･喜友名（1998）の作成した尺度を参考に34の質問項目を用いた。この尺度には概念体系（子どもとはどんなものか）と価値体系（子どもにどうなってほしいか）の２体系の尺度がある。概念体系の尺度には６つの因子（①可能性、②否定的、③あてになる存在、④一個の人間、⑤未熟な存在、⑥理解可能な存在）があり、価値体系の尺度には４つの因子（①立身出世、②親族主義、③開放性、④自己制御）がある。

Ⅲ　結果と考察

①プロフィールによる分析

エゴグラムのプロフィール・パターンの分類は東京大学医学部心療内科 TEG 研究会（2006,2009）の分類方法に基づいて分類した。

表１　エゴグラムの平均値

CP	NP	A	FC	AC
11.20	14.82	9.29	13.09	13.54

n=136

表１は全体（n = 136）のエゴグラムの平均値である。また全体平均を TEG Ⅱのプロフィール表に当てはめると図１のようになった。パターン分類としては平均型である。全体の平均値であるため、平均的なプロフィールに納まったといえる。その中で、個々の自我の特徴としては AC の値が少しだけ高い。AC は適応的な子どもの心であり、全体的に従順で、主体性に欠ける特徴がいえる。

次に、一人ずつのプロフィールに対してパターン分析を行った。表２はパターン分類の人数である。AC 優位型が最も多く35名、次いで AC 低位型11名、NP 優位型10名、A 低位型９名と続いている。

本研究ではパターン分類で人数の多い５つのパターン分類を今回の分析対象とした。図２はそれぞれのパターンごとのプロフィール表である。もちろん同じプロフィール・パターンによる平均値であるため、それぞれのグラフにはパターンの特徴が出るのは当然であるが、それぞれのグラフの特徴から改めて性格特性を分析した。

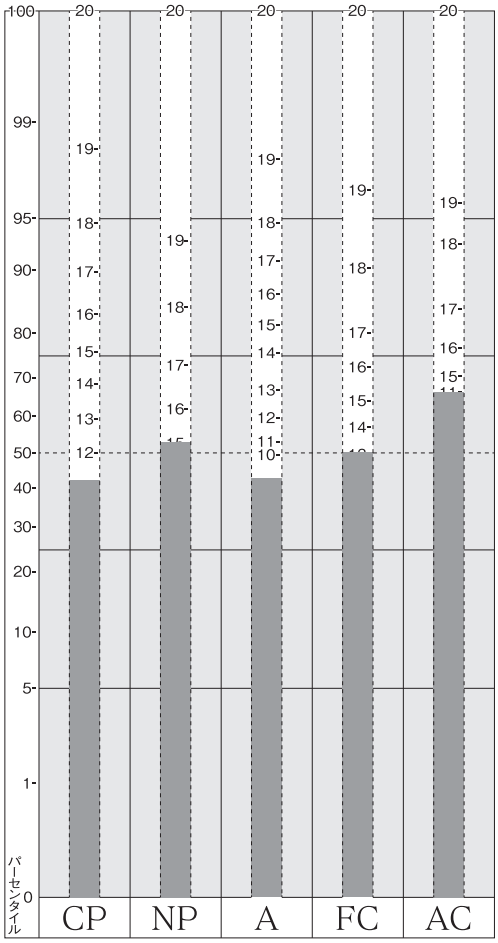

図１　全体（n=136）のエゴグラムの平均値プロフィール表

AC 優位型によるプロフィールの特徴として、AC の高さに加えて、CP の低さが特徴として表れている。このタイプは人に気づかいができ、指示されたことはこなせるが、自分が先頭に立って何かを成し遂げるのは苦手である。一方で、CP の低さからのんびり屋であり、いい意味で物事にこだわらないが、いい加減な部分もあるといえる。

表２　パターン分類ごとの人数

AC 優	AC 低	NP 優	A 低	N1
35	11	10	9	7
CP 低	FC 優	NP 低	W	中平
6	5	5	5	5
CP 優	M	C 優	N2	P 優
4	4	3	3	3
その他（2 名以下のパターン）				
12				

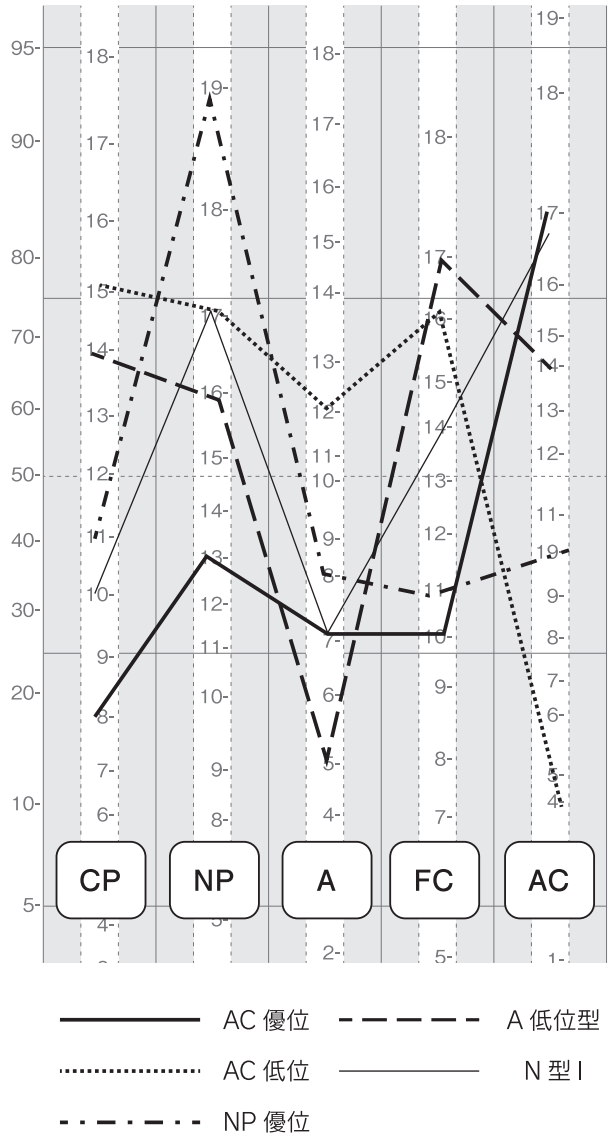

図２　上位５パターンごとのプロフィール表

AC 低位型の学生の特徴として、行動力はあるが、自分の思うとおりに動いてしまい、気づかいや思いやりに欠ける点が挙げられる。一方で FC は比較的高めであり、自由で積極的な面も見られる。また CP が高いことから完璧主義なところもあり、自分が思ったことへまっすぐつき進んでいくタイプだといえる。

NP 優位型の学生の特徴として、人への優しさや面倒見の良さなどが挙げられる。FC の高さから創造性に富み、感情表現が豊かであるという特徴も挙げられる。

A 低位型は論理性に欠けることが挙げられる。FC が高いことから感情豊かであるが、気分のままに動いてしまい、自己中心的になってしまう可能性があるといえる。

N型Ⅰの特徴としては、NPとACの高さから、人にやさしく、他人に尽くすタイプであるといえる。ただし、嫌なことでも断ることができないため、ストレスを抱えやすいのではないかと考えられる。

全体の平均ではACが高めであり、実際にAC優位型が35名と多く、全体として適応的なタイプの学生が多いということがいえる。この結果は佐久本（2016）の調査と同様の結果であり、現代の大学生の特徴でもあるといえる。Cが高いのは子どもらしさでもあり、子どもに関わる学生にとって高い方が望ましいかもしれないが、FCはそこまで高くない。デュセイ（1980）は、ACについて「妥協する、忍耐する、他人に対して寛大である」と述べており、他人と順応し、子どもたちとイメージを共有しながら、社会性を育くむような関わりをする力が備わっているといえる。また、NPが高い学生が多いことからも、優しさや面倒見の良さが備わっている。一方で、ACが高い傾向は、現代の大学生の特徴でもあるが、主体的な学びが苦手な学生が多いことが考えられる。講義や演習、実習でもそうであるが、指導者の指示に従うことは大事なことである。しかし、自ら主体的に学べる力や勇気を持たせていくことも保育者には必要であるといえる。想像力や子どもに合わせる力は持っているため、関心や意欲を高める学習方法が望まれているのではないかと考える。また、様々な学習や体験の中で、自信を持たせ、失敗してもやり直せる精神を育てていくことが望ましいと考えられる。

そのような学生が多くを占める中で、AC低位型やAの低さなどから、活発な活動はできるが、気づかいや協調性に欠ける学生も一定数いることになる。こちらも、よく言えば子どもらしさを持っていると評価できるが、大人として保育者として子どもたちと関わる職業である以上、ある程度Aを上げていくことが望まれる。保育養成課程において、Aを上げる方法として考えられるのは、毎時の学習に疑問や課題を持たせること、問題や状況の全体像をつかませ、結果を予測してから行動すること、気持ちを落ち着かせ、冷静さを保てるようにすることである。グループ活動が多くなる学習過程であることから、人間関係のトラブルも起こりやすいため、個々の性格に応じたサポートも求められているのではないだろうか。

②プロフィール・パターンによる子ども観の違い

プロフィールの分析と同様に、上位５パターンについて、それぞれの子ども観の違いについて検討した。

５つのプロフィール・パターンによって子ども観（概念体系）の６つの因子の得点が異なるかどうかを検討するために、１要因の分散分析を行った。各因子において、それぞれのパターンごとの平均値を表３に示した。分散分析の結果、「一個の人間」と「未熟な存在」の因子において それぞれ１％水準、５％水準で有意であった（「一個の人間」:$F(4, 67) = 5.05$ $p < .01$,「未熟な存在」:$F(4, 67) = 5.05$ $p < .05$）。そこで、TukeyのHSD法（５％水準）による多重比較を行ったところ、「一個の人間」と「未熟な存在」においてAC優位の方がAC低位に比べて有意に高いということが示された。

「一個の人間」は「子どもは一人で生きていけない」といった質問項目などからなっており、この項目が高いということは、子どもには大人のサポートが必要だと感じているという結果になる。また「未熟な存在」が高いということは、子どもは未熟な存在であり、やはり大人のサポートが必要であるということを認識していることになる。AC優位型がAC低位型に比べて、これらが高いということは、適応的で、指示待ちであるAC優位型の自分たちと同様に、子どもたちに対してもだれかが引っ張る必要があるのだと思う傾向があると考えられる。一方で、AC低位型はFCが比較的高いこともあり、「子どもたちは自由な存在である」という点の方を強く感じることができるのではないかと考えられる。つまり、子どもを大人がサポートしていくというよりも、子どもを自由にのびのび育てたいという感覚がより強いのだといえる。

次に子ども観（価値体系）も同様に４つの因子の得点がプロフィール・パターンによって異なるかどうかを検討するために、１要因の分散分析を行った。各因子において、それぞれのパターンごとの平均値を表４に示した。その結果、価値体系については有意な差が出なかった。「開放性」において10％水準での差が見られたが、多重比較では有意な差が見られなかった。これはN型Ⅰのパターンの人数が７名であったことから、多重比較を行うにおいては統計票本数が少ないことが考えられる。「開放性」は子どもの自由について価値観を求めている項目であるが、N型Ⅰの学生は

表３　子ども観（概念体系）の平均値

		平均値	標準偏差			平均値	標準偏差
可能性	AC 優位	4.39	0.45	否定的	AC 優位	2.98	0.66
	AC 低位	4.47	0.31		AC 低位	2.71	0.76
	NP 優位	4.31	0.38		NP 優位	3.06	0.74
	A 低位	4.53	0.40		A 低位	3.13	0.64
	NI	4.15	0.81		NI	2.94	0.60
	合計	4.39	0.46		合計	2.96	0.67
あてになる存在	AC 優位	2.54	0.56	一個の人間	AC 優位	3.70	0.78
	AC 低位	2.33	0.72		AC 低位	2.71	0.76
	NP 優位	2.38	0.66		NP 優位	3.06	0.74
	A 低位	2.91	0.96		A 低位	3.13	0.64
	NI	2.83	0.51		NI	2.94	0.60
	合計	2.56	0.66		合計	3.31	0.82
未熟な存在	AC 優位	4.11	0.57	理解可能な存在	AC 優位	2.84	0.80
	AC 低位	3.52	0.58		AC 低位	3.23	0.65
	NP 優位	4.10	0.39		NP 優位	3.25	1.11
	A 低位	4.04	0.56		A 低位	3.11	0.82
	NI	4.00	0.47		NI	3.64	0.48
	合計	4.00	0.57		合計	3.07	0.83

表４　子ども観（価値体系）の平均値

		平均値	標準偏差			平均値	標準偏差
立身出世	AC 優位	3.48	0.66	親族主義	AC 優位	3.92	0.59
	AC 低位	3.65	0.80		AC 低位	4.20	0.60
	NP 優位	3.14	0.78		NP 優位	3.96	0.80
	A 低位	3.82	0.70		A 低位	4.00	0.63
	NI	3.71	0.45		NI	3.77	0.56
	合計	3.53	0.70		合計	3.96	0.62
開放性	AC 優位	4.49	0.47	自己制御	AC 優位	3.89	0.58
	AC 低位	4.55	0.50		AC 低位	3.85	0.48
	NP 優位	4.20	0.42		NP 優位	3.70	0.74
	A 低位	4.59	0.32		A 低位	3.70	0.75
	NI	4.00	0.94		NI	3.62	0.76
	合計	4.42	0.53		合計	3.81	0.62

子どもたちの自由度よりも面倒を見て育ててあげたいという気持ちが先行しているのではないかと予想される。パターン分類の人数をそろえることでその差がより正確に見られるかもしれない。

Ⅳ　総合考察

本研究を通して性格のパターンは学生それぞれの特性であったが、全体傾向としては、AC 優位型が多く、AC が高い傾向にあった。AC 優位型は林（2007）をはじめとして、女子学生では多く表れているパターンで

ある。特徴としては、いい子で、周りの期待に応えようと頑張るが、消極的で主体性に欠くことが多く、講義中も発表や意見を言わない学生が多いことが挙げられる。また辛い事を自分の中に抱えてしまって、自分の中にストレスを抱え込み、なかなか相談できずに最終的には離職してしまう新任保育者の姿も想像できる。

このようにAC優位型はどちらかといえばマイナスの面が強調されることが多い。実際、加曽利（2012）は新入生に対する性格と不安についての重回帰分析の結果から、高いACは抑うつ傾向の高さを予測する因子であると結論づけている。ACが高い学生に対しては、学生一人一人の不安に対して適切な支援をし、Aを上げていくことが保育者養成において臨まれるのではないかと考えられる。

一方で、ACの高い学生は子ども観の結果からも、子どもの教育や保育に熱心であることが考えられる。つまり、全体傾向としてもともと子どもに高い価値観と可能性を期待している状態である。毛利（2019）においても、保育学生は子どもを肯定的にとらえる傾向を示しており、保育に関わろうとする意志の高さは見えてとれる。このことからも、子どもに寄り添う意欲を大切にしながら、性格で言うところのAやNPの部分を上げていき、少しずつ積極性や主体性を養っていくことが求められている。

逆にAC低位群の学生においては、FCが高かったことから、創造性や積極性の高さが挙げられる。子どもに対する価値観と可能性や期待の高さはACの学生と変わらないため、子ども任せである保育をしてしまう可能性や、自分自身がマイペースなことや自己中心的になりやすい面を修正していくことが求められている。

どちらの性格特性にしても、Cの高さを保ちながら、保育者としてNPやAを上げていく形が求められている。保育者として求められているものはどちらも共通であるため、性格に応じた個々の対応はもちろんだが、様々な性格が存在するメリットを集団における演習や実習に盛り込むことで、相乗効果を期待できるのではないだろうか。例えば、AC低位群がAC優位群を積極的に引っ張り、逆にAC優位群からAC低位群が協調性を学んでいく演習環境を作ることが、結果として人間関係の学びや保育者の資質を高める指導につながるのではないかと考えられる。

Ⅴ　まとめと今後の課題

本研究では保育学生の性格特性をTEG Ⅱによって分類し、子ども観との関連性について検討した。その結果、AC優位型の学生が多く、一部の子ども観において差が出たことから、性格に基づく保育学生の養成や指導の指標の一つについて考察した。

一方で、性格のパターンによって一部の子ども観についての違いは見出せたが、TEG Ⅱのパターン分類が多数に渡るため、それぞれの性格のパターンによる子ども観の違いまでは検討できなかった。

性格のとらえ方には様々な方法がある。また全体の傾向をとらえることはできるが、一人として全く同じ性格の学生はいない。それに加えて、TEG Ⅱによる性格は変化することも考えられることから、所属や調査の時期によって結果も変わってくることが考えられる。今回の研究のように、全体の性格傾向を検討することで保育者の資質についての考察を深め、今後、それぞれの性格傾向に応じた指導方法や新任保育者に対する支援方法を検討していくことが望まれる。

Ⅵ　引用文献

デュセイ ,J.M.（1980）. エゴグラム－ひと目でわかる性格の自己診断　創元社

林 悠子（2007）. 幼児教育学科学生の性格特性について　奈良文化女子短期大学紀要 **38**, 151-160.

林悠子・森本美佐（2014）. 保育者に求められる学生の保育実践能力と資質について　奈良学園大学奈良文化女子短期大学紀要　**45**, 123-130.

星野英五・石橋尚子・藤本逸子・松田憲治　(1995).　保母養成カリキュラムの基礎的研究－学生の子ども観・保育者観形成に関する三大学間比較を中心に－　保母養成研究　**13**, 79-88.

池本美香（2015）. 保育士不足を考える：幼児期の教育・保育の提供を担う人材供給の在り方　JRI レビュー　**28**（9）.

嘉数朝子・喜友名静子　(1998).　保育科短大生の「子ども観」尺度に関する研究Ⅱ　日本保育学会大会研究論文集　**51**, 812-813.

加曽利岳美（2012）. 大学新入生における抑うつ傾向と恥および罪悪感との関連.　文京学院大学人間学部研究紀要 **13**, 101-122.

毛利泰剛（2018）. 保育者養成課程における学生の実習経験によるイメージ変化の検討－遊びイメージと子ども観について－　福岡女学院大学紀要　**19**　人間関係学部編, 31-38.

毛利泰剛（2019）. 保育実習経験による保育者観と子ども観の変化の検討－教員養成課程の学生との比較を通して－　福岡女学院大学紀要　**20**　人間関係学部編, 53-

60.
佐久本邦華（2016）. 沖縄県内の保育士を目指す学生の特徴：TEG 第２版（東大式エゴグラム第２版）による分析　沖縄キリスト教短期大学紀要　**44**, 87-99.
高橋千賀子・高岡昌子・林悠子・岩本健一（2016）. 保育者養成校の学生の性格特性および進路状況との関連について　奈良学園大学奈良文化女子短期大学部紀要　**47**, 41-48.
東京大学医学部診療内科ＴＥＧ研究会（編）（2006）. 新版 TEG Ⅱ 解説とエゴグラム・パターン　金子書房
東京大学医学部診療内科ＴＥＧ研究会（編）（2009）. 新版 TEG Ⅱ活用事例集　金子書房